

文学史としての源氏物語

— 目次 —

はしがき……………1

序章 日本物語文学史の方法論——風巻景次郎氏に導かれて……………5

はじめに……………7

一 風巻景次郎と「文学の発生」……………8

二 風巻景次郎と「文芸と個性」……………10

三 風巻景次郎の『源氏物語』研究の自己撞着……………12

四 風巻景次郎の未生の可能性……………17

五 文芸批評の目的とは何か……………19

六 これからの課題……………22

おわりに……………23

第一章 『源氏物語』の内裏と都……………29

第一節 大内裏と内裏の文学空間……………31

はじめに 古代天皇の都とは……………31

一	都の聖と俗	33
二	天皇の呼称と内裏の構造	36
三	天皇の統治と都の構造	40
四	内裏の鬼	41
五	文学空間としての平安京内裏	43
第二節 花の景としての都——須磨・明石巻を中心に——		
	はじめに	49
一	都の重層性	50
二	都という語の対義語と同義語	56
三	都の花、花の都	58
四	花の景	67
五	都であるふるさと	70
六	花の景としての都	73
	まとめにかえて	74
第三節 『源氏物語』 「先帝四宮」考		
	はじめに	77
一	『源氏物語』における「先帝」	79

二	光源氏が女三宮から得たもの——大嘗祭に寄せて——	83
三	「先帝」の系譜を継ぐ「紫のゆかり」	86
四	「先帝」と聖代	87
	まとめにかえて	91
	第二章 『源氏物語』の叙述と様式	97
	第一節 『源氏物語』「垣間見」再考	99
	はじめに	99
一	「かいまみ」の用例から何が分かるのか	101
二	空蟬巻の垣間見	103
三	椎本巻の垣間見	107
四	『伊勢物語』の垣間見	111
五	物語に共有される垣間見の様式	112
六	「かいまみ」の研究史	114
七	若紫巻の垣間見	117
八	野分巻の垣間見	120
九	嫁比べの様式	123

まとめにかえて	垣間見の類型	127
第二節 『源氏物語』 「垣間見」 追考		145
はじめに		145
一 「古事記」「日本書紀」における「見るなの禁詞」		147
二 垣間見の語の表記		153
三 「竹取物語」「伊勢物語」における「かいまみ」		157
四 垣間見において何が神話的なのか		160
五 姉妹に求愛する婚姻習俗の可能性		163
——宇治大君・中君に対する垣間見と比べて——		
六 『伊勢物語』 初冠段本文の問題——「女はらから」か「女はら」か——		165
七 物語における垣間見の類型		166
まとめにかえて		168
第三節 『源氏物語』 伝承と様式——花散里巻をめぐって——		173
はじめに		173
一 花散里巻の読まれ方		176
二 『伊勢物語』の章段における対称法の様式		179
三 花散里巻とはどのような本文 <i>text</i> か		184

四	花散里という場所……………	187
五	物語におけるペルソナの転換……………	190
	まとめにかえて……………	191

第三章 『源氏物語』の表現と構造…………… 197

第一節 『源氏物語』の二重構造…………… 199

	——表層の犯しと深層の皇位継承争いと——……………	199
	はじめに……………	199
一	『源氏物語』の仕掛けと仕組み……………	204
二	罪と犯し……………	205
三	古代における罪意識……………	211
四	『源氏物語』の成立順序に関する先行研究……………	212
五	若紫卷の抱える二重構造——短編性と長編性と——……………	214
	まとめにかえて……………	219
	第二節 『源氏物語』の場面構成と表現方法——末摘花卷を例として——……………	225
	はじめに……………	225
一	物語の場面と事項……………	226

二	光源氏を連れ出す仕掛け	232
三	季節と男女と和歌	233
	まとめにかえて	235
第三節 『源氏物語』における風景史——景物から原風景へ——		
	はじめに	239
一	清少納言『枕草子』の風景	240
二	日記文学における風景の胚胎——前史としての『土佐日記』——	243
三	『蜻蛉日記』の風景——風景の発見——	245
四	『更級日記』の風景——自然を叙述しようとする試み——	246
五	『源氏物語』の風景（一）——漢詩と和歌を導く景物——	248
六	『源氏物語』の風景（二）——未生の風景——	251
七	『源氏物語』の風景（三）——存在の原風景——	252
	まとめにかえて	255
結章 文学史としての『源氏物語』——浮舟の贖罪と救済——		
	はじめに	265
一	宇治の物語の前史	265

初出一覧	323
あながき	327
索引(人名・書名・主要語彙)	329
1 光源氏物語とは何か	265
2 光源氏物語の原構想	267
3 光源氏の運命の逆転と住吉神	268
4 若菜巻における物語の転換	271
二 『源氏物語』 にとって宇治とは何か	276
1 都の隅っことしての宇治	276
2 宇治橋と橋姫——姫君の古層——	279
3 宇治大君と薫との対偶	283
4 物語に繰り返される「女は」論	287
5 「身」と「心」との相克——大君と浮舟—— 造型原理の逆転——	292
三 大君の拒否とは何か	299
四 浮舟に負わされた課題	303
1 浮舟入水と贖罪	303
2 浮舟に託された紫式部の苦悩	309
3 浮舟の出家と救済——物語の行く方——	312
まとめにかえて	316

はしがき

『源氏物語』を読むというとき、巷間用いられる用語で言えば「読み」というものの面白さが問われる。ただ危険なことは、すでに成立しがたいことが自明であるような「思い込み」も許されず、まうことがある。「読み」の新しさを競うとしても、「読み」の恣意性をどのようにして抑制し、仮説として客観性を与えることができるだろうか。

一方、経験的な知見からすると、古典文学研究の伝統的な手法として「出典と受容」という枠組みに基く分析は、手慣れた方法としてよく知られている。例えば、日本古代文学史の中で『源氏物語』を考えるときに、何という作品のどこを下敷きにするかとか、何というテキストのどこを利用したかとか、何というテキストに影響を受け翻案したかというような批評が行われてきた。

ところが、常識的と見えるこのような研究方法は、果たしてなお妥当でありうるのだろうか。例えば、作品の「成立」にとつて「出典」がこれだ、これ以外に「出典」はないとなぜ断定できるのだろうか。というのも、現在（偶然にも）残っている文献や資料が、かつて存在した全てでないことはすぐに考え付かれるからである。

あるいは、彼と此との本文が極めて類似しているとして、客観的に言えることは何を共有している

かということだけである。そのとき、本文の全体を支える枠組みにおいて共通性を認めうるのか、構成的部分的な共通性なのか、モチーフやプロットなどの次元における共有なのか、具体的な表現における共有なのか、あるいはそれらの幾つかについてであるのか、等々。

彼と此と本文の間に何らかの共通性があるということは、すでに影響の存したことの証あかしでもあろうが、それではどのような影響なのか、と改めて詳細を問い直されたならば、(誰もが)何も答えることはできないに違いない。むしろ、そのことの詮索はあまり意味をなさない、あるいは有効ではない、と言わなければならない。

そこで、このような研究方法を思い切って逆転させてみると、実は、さまざまな「作品」から、さまざまな次元で影響を受けた結果 *result* が、『源氏物語』の本文であるということが言えるのではないか。もう少し具体的に言えば、『源氏物語』そのものが重層的な本文として構築されているのではないか、という印象がある。それでは、そこにいう重層性とは何か。すなわち、『源氏物語』は物語を支える古層の枠組みを下敷きとして、新層の表現を重ね合わせるという意味で、まさに重層的な本文として構築されているのではないか。

それでは、古層とは、何をもって古層と言いつけるのか。近時、私が注目してきたことでいえば、古層をなす伝承は、『古事記』『日本書紀』よりも、地誌としての『風土記』の神話に、顕著にまた典型的に認められる。もう少し厳密に言えば、『風土記』の記事の中から神話を抽出することができる。そのとき、物語が枠組みにおいて神話に基づくことを明らかにすることができる。

それでは新層とは何か。それは「作者」による説明的な言説である。そこには、社会的なもの、歴

史的なもの、「作者」個別の興味の働いたものなどが合わされている、というふうに理解してよいだろう。

そのように捉えたときに、ようやく『源氏物語』のどこに「影響」があるのかといった「追認的」な批評を克服することができる。つまり、わが国文学研究のめざすところは、日本的な精神や心性 mentality の解明だけではないし、逆に普遍的な元型 archetype の発見だけでもない。まさに『源氏物語』がどのような仕掛けや仕組みによつて構築された本文であるかを明らかにすることを目的とする、と言挙げすればよいのではないか。

その目的と方法こそ、『源氏物語』の本文そのものが「文学史としての『源氏物語』」であること捉えることに他ならない。ひとこと言えば、紫式部という存在を睨み据えつつ、古代の古代、古代の近代との併存する本文としての『源氏物語』を、基層と表層との重層性において捉えるという目論見である。

もちろん、ここにいう文学史とは、作品の年代誌的な記述をいうものではない。また、いわゆるテクストの引用論的な分析でもない。言葉の正しい意味で、『源氏物語』を重層的な本文として捉えることである。そのとき、初めて、検証の手続きを経ない「読み」といった次元の「解釈」や、「出典と受容」といった枠組みに基く伝統的な分析を超えることができるのではないだろうか。

あとがき

一昨年（二〇二二年）の春、大阪大谷大学を会場とした中古文学会大会の折、武蔵野書院の前田智彦社長から何か書くようにと御声を掛けていただいた。大学に入学したときから、私の生涯のささやかな目標は『源氏物語』の研究書を残すことだったから、制度上の定年をひとつの目途として、自分で納得のゆく『源氏物語』に関する研究書をどうしても閉じ目には書きたいと考えていたので、これは大変嬉しくありがたいことであつた。

前田社長には、改めて心から感謝の辞を申し述べたい。

それ以来、勤務の合間に、寸暇を惜しんで書くこうと務めたつもりであるが、なかなか思うようには捗らなかつた。さりとて、原稿を抱え込んでいただけでは一向に埒があかないため、新たに書き足そうという欲張りなことはついに思い諦め、恥を忍んで拙い出来のまま纏めてしまうことにした。

しかも、本書を書く途中で何度も気付いたことであるが、仮説を論証しようとするよりも、思い余りて言葉足らずの状態のまま、ただ「思い」だけを繰り返し述べただけになり、なお意を尽くせない所も残ったままになっている論考があまりも多い。私の力の至らなさには忸怩たる思いがある。

特に、第三章第二節の末摘花巻についての小文などは、勤務先の大学内で毎週、大学院生・学部生と一緒に続けている『源氏物語』のささやかな勉強会で話した文章をそのまま載せただけのもので、今にして言えば、もっと詳細かつ物語全体の視野のもとで論ずればよかったと思うばかりである。

というのも、武蔵野書院に入稿させていただいて本当に間もなく、拙い引用の出典の一本に立ち戻って点検を

していただいた完璧な内校を返送して下さったときには、自分の杜撰さに恥じ入るとともに、大変恐縮してしまつたからである。この場を御借りして手間暇を惜まず校正の労を取っていただいた社長と編集担当の方々に、心から御礼を申し上げるものである。

そのように、実にいい加減な内容であるのだが、もはや思弁的と難ぜられてもよい、稚拙ゆえに問題提起にもなっていないと評されても仕方がない、それでも敢えてもの言うべきことがあると厚顔にも考え直すことにした次第である。

おそらく中古文学会の硬質な空気の中では、私のような『源氏物語』論は、極めて座りの悪いものであるに違いない。まず、物語を論じるのに、神話や昔話を対照させる必要があるのか、と。しかしながら、それは私学に学んだ自分の考えや生き方と不即不離のことであるから、なんとも避けがたいことである。御名前をすべて挙げることはできないが、怠惰な私を常に叱咤激励して下さる得難い友人たちと、学恩を賜った先学諸氏すべての方に対して、感謝を申し上げるとともに非礼を御詫びしたい。と同時に、老耄の頑固さもここに極まれりという他はないと嘸わらっていただければ幸いである。

廣 田 收

二〇一四年九月